寄 稿

幼児期における絵本体験の重要性

別府大学短期大学部保育科講師
江　良　愛　子

はじめに

書店には数多くの絵本が並んでいる。本棚の前でページをめくり，本の選択をしている母子を見かけることが最近多くなった。母親だけではなく，父親に連れられた幼児の姿も見かける。それだけ，絵本に対する興味・関心が高まっているということであろう。

「第３回幼児の生活アンケート報告書」（ベネッセ研究所報 vol.35）によると，ここ５年間で，目立って増加している幼児の遊びは「公園の遊具を使った遊び」や「ボールを使った遊び」と並んで「マンガや本（絵本）を読む」ことであると報告されている。また，家にあるものの中で使用頻度が特に高いものが絵本であるとも報告されている。毎日または週に３～４日使用しているのは１～２歳児が83%，３～４歳児は約80% となっている。どのような絵本を手にするのか，どのような使われ方をしているかは不明であるが，家庭において幼児が絵本を手にする機会はかなり高くなっているといえそうである。

最近は、公共の図書館も充実しており，親子での閲覧もできるが，一度に数冊の貸し出しもされ，それを利用する親子が多いと聞く。地域では母親達による絵本サークルの活動が活発である。県立図書館が実施した「子ども文庫・読み聞かせ交流会」で把握した絵本サークルのグループ数は平成14年度に93グループ，15年度は107グループという。主な活動場所は，公立図書館，学校，幼稚園や保育所（園），公民館等である。

幼稚園や保育所（園）では，保育者による読み聞かせが行われている。また，良書といえる絵本がかなりそろってきており、園によっては絵本の貸し出しも行われている。

２歳から６歳の子どもをもつ保護者203名への聞き取り調査（16年度「環境と遊び」の授業における本学１年次生による調査）によると，93％の家庭が，毎日または時々読み聞かせをしていると回答している。絵本の読み聞かせの意義についての質問（複数選択の回答）に対しては，読み聞かせをしている家庭の63％が「豊かな心･想像力が育つ」，44% が「本好きになってくれそう」，37% が「子どもとの心のつながりができる」と回答している。読み聞かせの大切さを認識し，日々実践している家庭が多い。

ところが，多くの家庭が読み聞かせをしている一方で，全くしていない家庭も７％ある。また，複数選択の回答ではあるが，読み聞かせの意義についての質問に対して，「文字を早く覚えるから」が16％，「早く眠ってくれるから」が４％あり，読み手本位の考えで読み聞かせが行われていることも現状としてある。

テレビやビデオの視聴時間についての聞き取り調査によると，一日２時間が40％，１時間が34%であるが，約７％の家庭では４時間以上視聴している。その上，約８％が夜10時頃まで起きてみているという結果が出た。また，テレビやビデオを見る良さについての質問（複数選択の回答）に対して，94％の家庭が「その間仕事ができる」「見ている間は静かにしている」を選択し，約36%が「ことばが発達する」を選択している。「知識がつく」「リズム感がよくなる」約30%，「心が豊かになる」21%と続く。テレビやビデオを見るのが悪いというのではないが，活字離れ、本離れが広がる現状の中で、約40%の家庭がチャンネルを子どもに任せているということからも，テレビの視聴時間・内容選択のしかた・親のかかわり方等については今後の課題となろう。

人間形成の最も大事な時期である幼児期は，植物にたとえるならば根っこの部分にあたる。この根っこがたくましく育つためにも，幼児期における絵本体験は重要である。幼児を取り巻く人的環境としての親，保育者はもちろん，保育者をめざす学生たちが，一人でも多く，読み聞かせの意義を認識し，実践に取り組んでくれることを願い，絵本との出会いが人間形成にどのような影響を及ぼすのか考えてみたい。

幼児期における絵本との出会いの意味

原体験としての絵本

筆者には，幼児期の体験が，鮮やかによみがえってくる瞬間がある。それらの多くは自然環境とのかかわりを通したものが多い。もう一つが絵本との出会いである。昔話を読み聞かせてくれた祖母の語り口調と共に，祖母に寄りかかったときの木綿の感触や，膝のぬくもり，庭先の陽だまりの心地よさを，昨日のように感じる。打ち出の小づちで若者の背がグングン伸びていく様子や，大きいつづらの中から何やら恐ろしいものがとび出てくる様子などを想像して，ワクワク・ドキドキしたことを思い出し，心が温かくなる。ゆったり流れる時間の中で，心が癒されたあのときの幸せ感がよみがえってくる。それは，音，匂い，色，手触りの感触などを伴い，心を満たしていく。

つまり、心の奥底に蓄積されていた幼児期の五感を通しての実感が，折に触れ，埋み火のように思い起こされ，自分自身の心を奮い立たせてくれるのである。

このように，絵本との出会いは，決して，そのとき限りの出会いで終わりなのではなく，柔軟な心をもつ幼児の心のひだに刷り込まれ，生きていくうえでの原体験として重要な意味をもたらすのである。

ゆさぶられ，もみほぐされながら心豊かに

読み聞かせをしてもらっているときの幼児の表情は，どの子も子どもらしさにあふれている。絵本の世界にいつの間にか引き込まれ，顔がほころび，時には口をアングリ開けて聞き入っている。「アーッ」とため息をついたり，顔を手で覆ったり，ホッとした表情をみせたりなど，天真爛漫な幼児本来の姿をみることができる。絵を見，耳からことばを聞きながら想像の世界に遊んでいるのであ

る。登場人物と同化し，楽しさやスリル感，やさしさや悲しさなど様々な気持ちにふれ，自分の経験と結びつけたり，新たな感情体験をしたりしていると思われる。インドのニューデリーで開催された国際児童図書評議会世界大会におけるビデオ講演の中で，皇后陛下がご自身の体験をもとに「本というものは，時に子どもに安定の根を与え，時にどこにでも飛んでいける翼を与えてくれるもののようです。」と述べられた。翼を羽ばたかせながら大空を飛び，海に潜り，森の動物と戯れ，自由気ままに未知の世界を旅しながら心を解き放つ絵本との出会いは，豊かな心を育む上で大切なことである。

ある年の節分の翌日のことである。４歳児のＫ児達が園庭の真ん中で穴掘りをしていた。豆まきをした豆が園庭のあちこちに散らばっており，それを拾い集めて穴に放り込んでいるのである。「『ジャックと豆の木』の豆みたいに大きくなるかな」「そしたら雲の上まで登っていけるね」「鬼がいるよ。降りてきたらどうする？」「鬼は外って豆まきしよう」と会話が弾んでいる。ここには、時間のたつのも忘れてお話の世界に浸り，いきいきと心を弾ませている幼児の姿がある。

このように，絵本との出会いによって多様な感情体験をし，想像の世界に遊びながら，心がゆさぶられ，もみほぐされることによって豊かな心が培われていく。

心のつながり・愛されている喜び

児童文学家の松居直氏が『絵本の力』（岩波書店）の中で次のようなことを言われている。

「幼年時代，私の母が，毎日ではないが，絵本，そのころは『コドモノクニ』という絵雑誌をよく読んでくれていました。____(中略)____ 子どもにとってよい読み手でした。同じところを何度でも読んでくれる。４回でも５回でも同じところを読んでくれる。____（中略）___　唯一母親を独占できるのがその時間ですので，私は目をパッチリ開いて，耳をピーンと立てて聞いているわけです。」

商家の女将さんであった母親が氏のために絵雑誌を読んでくれる時間が「唯一母親を独占できる時間」であり，母親とのつながりを感じる時間だったのである。

学生へのアンケート調査「幼いときに読み聞かせをしてもらった記憶について」（2005. 7　本学学生159名対象）の中で，「安心感や楽しさを感じた」「お母さん大好きと思った」「そのときだけは母（父）と過ごせてうれしかった」という記述が多く見られた。幼児期の家庭における読み聞かせの楽しさは，親とのつながり感とともに，いつまでも心に残っているのである。

幼稚園や保育所（園）での読み聞かせにおいても同じである。大好きな先生のそばで，大好きな先生の声をききながら，肩を触れ合い仲間と一緒に笑いあったり，ドキドキしたり，共感しあったりして過ごす時間は幼児にとって至福の時である。保育者との心のつながりはもちろんのこと，仲間とのつながりも感じていく。

たとえ，わずかな時間でも，それは読み聞かせをしてくれる人との濃密なかかわりの時間であり，幼児は心が安定し，愛されている喜びを感じていくと思われる。

言葉との出会い

ある時，３歳児の子ども達が，大きなプラタナスの葉を頭上で振り「いいでしょ　いいでしょ　クー

ルクル」とリズミカルに歌いながら楽しげに歩いているのを目撃した。その後，他の子ども達も入って大合唱になっていった。プラタナスの葉を持たない子どもは，頭の上で，指先をクルクル回し「いいでしょ　いいでしょ　クールクル」といいながら行進が始まったのである。後で聞いたところによると，その日読んでもらった絵本の中のうさぎやかえるになっていたらしい。幼児はリズミカルな言葉には大変敏感であり，それを，使ってみたくなるのも幼児の特性である。読み聞かせてもらった絵本に出てきた動物達が繰り返しつぶやく言葉が幼児の感覚を刺激したのであろう。

『おじさんのかさ』を読み聞かせた後のことである。雨上がりの園庭で「あめが　ふったら　ピッチャンチャン」と言いながら友達と散歩している幼児を見つけた。水溜りに長靴ごと入って，絵本の中の「ピッチャンチャン」のことばを仲間と共に実感しているのである。

幼児から何度でも読んでとせがまれる本の一つに『しろくまちゃんのほっとけーき』があるが,「ぽたあん」「どろどろ」「ぴちぴち」「やけたかな」「まあだまだ」「ふくふく」「くんくん」などの言葉をいつの間にか覚えて声に出して楽しむようになる。家庭でホットケーキを焼いたとき，子どもが「やけたかな」「まあだまだ」「ふくふく」「くんくん」と言いながら，焼き上がりを待っていたと親から報告を受けたこともある。絵本の中のことばは作者が精選したものであり，ことばのもつ美しさやリズムは幼児の言語感覚を大いに刺激するのである。

絵本の読み聞かせの後，劇遊びやオペレッタに発展することも多い。『おおきなかぶ』はその代表的なものといえる。「うんとこしょ　どっこいしょ　まだまだ　かぶは　ぬけません」のリズミカルな言葉を楽しみながら登場人物になりきって演じる。さつま芋を掘りながら「うんとこしょ　どっこいしょ　まだまだ　おいもは　ほれません」と, 部分的にことばを換えて楽しんでいる幼児もいた。「うんとこしょ　どっこいしょ　まだまだ　かぶは　ぬけません」のもつことばやリズムの楽しさを幼児なりに感じ取り，応用することによって言葉の世界を広げているのである。歌人の俵万智さんが，幼いころ『三匹のやぎのがらがらどん』の絵本が大好きで，毎日，お母さんに読んでいただき，いつの間にかお話を丸暗記していたという話を聞いたことがある。言葉の世界に遊ぶ楽しさを，この頃から身に付けていったのではないだろうか。

「ことばを食べる」という表現があるが，まさに，幼児は，絵本の中の美しいことばや楽しいことばに出会うことにより，それを栄養として，ことばの感覚を豊かにしているのである。

読書への誘い

読み聞かせによって，絵本の世界に遊ぶ楽しさを知った幼児は，当然のことながら，自分から絵本を手に取り，開くようになる。何度でも，同じ本を読んでくれと要求するようになる。同じ言葉，同じ場面で，同じように笑い声を上げ，次を予想し［やっぱり，〇〇になったよ」とワクワクしながら聞き入る。また，聞くたびに，新たな感動を受け，心おどらせていると思われる。

ある書店での出来事である。本を読んでいるらしい女の子の声が聞こえてきた。そちらを見ると，３歳児くらいの幼児が絵本を開いている。上手に読めるものだなと感心しながら絵本を覗き込んで驚いた。文字は２，３行しか書かれていないのに，女の子は，自分でストーリーを作って話していたの

である。つまり，絵を読んでいたわけである。絵の中から動物の会話を聞き，風の音を聞き，花の匂いを嗅ぎとりながら絵読みを楽しんでいたのである。この想像力，あるいは創造力には驚かされた。そばにいた母親の話によると，赤ちゃんの頃から読み聞かせをしていたとのことで，今では，寝るときに，必ず，４冊は読んでいるとのことである。

Ｓ子との出会いは小学校１年生のときだった。母親が絵本好きで，Ｓ子が赤ちゃんの時から読み聞かせをしており，字が読めるようになった今でも読み聞かせをせがまれるとのことであった。Ｓ子の想像力･創造力はは秀でており，ことばが豊か，絵も表現力豊かであり，読書量もかなりのものであった。

渡辺茂男氏は著書『心に緑の種をまく』（新潮社）の中で次のように述べられている。「一番適切なときに，絵本のたのしさを経験しないと，その後の読書習慣の形成に影響があります。幼いときに，親子で絵本を読む喜びは，心のスキンシップを育てるだけでなく，生涯続く読書の楽しさの源になるのです。」 幼児期の絵本との楽しいかかわりの体験は，将来の読書へつながる最短距離なのである。

学生へのアンケート調査（2005. 7 本学学生159名対象）によると，幼児期に読み聞かせをしてもらった記憶があると答えた学生の約半分が,「今, 自分が本好きなのは, 幼い頃読み聞かせをしてもらったことが大きく影響していると思う」と回答している。読み聞かせが，いかに幼児に対する影響が大きいか，将来の読書に影響するかを物語っているといえる。

終わりに

テレビなどによる映像文化の波が，活字離れ，本離れを引き起こしている原因の一つにあげられている。

学生たちに読み聞かせをさせたり, 筆者も読み聞かせをしたりする。すると, 不思議なことに, シーンとしてうっとりと聞き，終わると拍手が起こる。お話の世界に引き込まれるのは，幼児だけではなく，大人も同じなのである。それだけ，絵本の魅力は年齢に関係がないということである。読み聞かせの後,「改めて感動した」と感想を述べた学生もいる。懐かしくてその絵本を買った学生もいる。

２歳から６歳の子どもを持つ保護者203名への聞き取り調査（16年度「環境と遊び」の授業における一年次生の調査）によると，読み聞かせをしているうちの63％が「小学校に入っても続けたい」と回答（複数回答可）している。しかし，37％の保護者は「字が読めるようになったら自分で読ませたい」とし，先にも述べたように16％の保護者が読み聞かせの意義を「文字を覚える」からと回答している。４，５歳頃から文字に興味や関心が芽生えるのは一般的傾向であり，絵本に親しんでいるうちに，結果的に文字に興味を持つ幼児は多いだろう。だからといって，読み聞かせの目的を，文字を覚えさせるところにもつと，本嫌いにさせることにつながりかねない。決して，自分で読むように大人の側から強要してはならない。

小学校で１年生を担任したときのことである。授業終了後，机と椅子を後ろに移動し，児童に読み聞かせをすることにした。初めは「幼稚園みたい」など言っていた児童であるが, 続けているうちに, 読み聞かせを楽しみに待つようになり，集中力も次第に養われていった。図書館で本を借りる児童も

増えていった。子どもたちは，元来，本が大好きであること，良い絵本は年齢に関係なく受け入れられること，読み聞かせによって本の世界の楽しさを知った子どもたちは，自分で本を手にする喜びを味わえる子どもに育っていくことなどを実感した。

渡辺茂男氏は『心に緑の種をまく』（新潮社）の著書の中で「幼い子どもにお話をしてあげたり，絵本を読んであげたからといって，すぐに成果が目に見えるものではありません。幼い心に種をまく仕事だからです。」と言われている。絵本との出会いが，芽を育てるのか，枯らしてしまうのは，幼児を取り巻く人的環境のありかたにかかっているともいえる。

最近，「ブックスタート」運動が全国の自治体で活発に展開されるようになり，乳児期からの本との出会いが大切にされている。１歳児が，「いない　いない　ばあ」の絵本のとりこになり，何度でも読み聞かせをせがんだり，本をめくって好きな絵をじっと見入ったり，「ばあ」とまねをして遊んだりする姿はよく報告されている。実際，身近にいる１歳児にも，同じ姿をみることができる。確かに，本との出会いは乳児期からすでに始まっているのである。

川島隆太氏は「脳を鍛えるのは読書だとデータは強く示しています。学校及び家庭で自ら本に手を伸ばす子どもたちを育てていく努力をするべきだろうと思います。このときに，隗より始めよですね。親が家庭で本を読むことが，家庭での子育ての第一歩であると，先生方は保護者に向かって，声を出していただくのがいいだろうと思います。」と述べられている。

幼稚園・保育所（園）が子育てセンターとして，保護者に向けて，絵本の読み聞かせの大切さ，楽しさを伝えていく役割を果たさねばならない。一方的に映像や音声が飛び込んでくるテレビのとりこになる前に，ぜひとも，幼児と絵本とのよい出会いをさせてやりたいものである。

決して，絵本がすべてといっているわけではない。幼児が戸外で元気に遊び，友達や自然環境に自分からかかわり試行錯誤する中で，生きていく上での知恵を育んでいく過程を大切にするというのは当然のことである。

絵本の読み聞かせは，たとえ短い時間でも，読み手との温かいかかわりの中で，気長に続けられることにこそ意義があると考える。

［参考文献］

〇第三回幼児の生活アンケート報告書　研究所報 vol.35　ベネッセ教育研究開発センター 2006年
　　p .56　60　61　63
〇幼稚園教育要領解説　　文部省　フレーベル館 1999年
〇河合隼雄・松居直・柳田邦男　『絵本の力』 岩波書店　2001年
〇渡辺茂男　『心に緑の種をまく』 新潮社 1997年
〇川島隆太　「教育の回廊　脳科学と教育」『初等教育資料』2004年11月号
〇中村柾子　『絵本はともだち』福音館書店　1997年